

# 文化高知 22

## 現代の医学を考える

俵 壽太郎

科学隆盛時代の現在、科学は医療発展の為に大いに貢献している。しかし、医療に最高の科学を追究することにより、医療が患者に攻撃的になったり、また患者から様々なものを奪うことさえも起こり得ることがある。医療が、

による試験管ベビーである。このようなことを倫理的に考えてみる場合、人の生命はどの時点からスタートするものと判断したらよいのか、という問題が起こってくる。

医療従事者と患者の信頼関係の上に成り立つものである以上、医療の一方の側面である技術なるものが、医療現場でも教育現場でも、もっと正しく強調されなければならぬ。つまり、人類が倫理的に共通する心を持つようにならなければ、問題を将来に残すだけでなく、果たして人類に明日はあるのか、ということにもなりかねないからである。

最近行われているバイオエシックスとは、生命について非常に広い範囲にわたって関係するものであるが、その中で、人間の胚に関わる問題について述べると、英国では一九七八年に、世界最初の試験管ベビー（ルイズ・ブラウンちゃん）が誕生した。その後、代理母のお腹から一人の赤ちゃんが生まれた。これはロバート・エドワーズ博士と、パトリック・ステプトー博士



「にわとり」大野良一

医学は日進月歩のスピードで進んでいる。従って、医師にとって医学は生涯教育であって、常に医学教育と縁を切ってはやってゆけない状態になっている。更に科学は、生物の生命そのも

のまでも、かえてしまうところまで進んでいる。しかし、逆に完成されてしまった医学研究は何かというところ、数種類の伝染病が完全に撲滅されているに過ぎないとも言える。最近、新しく見出されたエイズなる伝染病は、現在なお倫理的・医学的・社会的問題として考えさせられる諸問題を残している現状である。

患者が求めているものは、最高の科学的な医療を受けたいという気持ちと同時に、やっぱり心のこもった人間関係を医師との間に、そして看護婦との間にも確立したいということである。患者は、管理されている医者が常に患者に向かって、上から命令するような医師―患者関係を、少なくとも求めていくものではない。対等になってむしろ患者との関係は深まり、お互いの信頼関係から治療効果も出て来るものである。

医学は常に最先端をゆく科学の粋を以て治療されなければならない。そして、常に医の倫理に関する問題を忘れてはならない。

(高知医科大学学長)

# 心のふるさと

## 土佐

池田 武邦

私にとって「高知」は「土佐」という言葉にして始めて故郷らしい、温もりをもったひびきになって心に泌みてくる。

私は未だかつて高知に住んだことはない。しかし、生まれてから成人するまで、父と母を通して「土佐」は日常的に我が家の空間を満たし、私の心の形成に大きな影響を与えていたことは、まぎれもない事実である。

父は香美郡徳王子村（現在の香我美町）に生まれ、母は同じ香美郡岩村（現在の南国市）に生まれた根っからの土佐の人であった。

父は明治十五年、地主で村長であった祖父池田勝信の長男として生まれ、成人して海軍兵学校に入學、明治三十七年卒業と同時に日本海海戦に参戦している。母との縁談があった時は海軍大尉であった。

母は明治二十三年山本賢一郎の末娘として生まれた。親子程も年の差のある異母兄妹の長兄忠秀（文久二年生まれ）が貴族院議員、農工銀行頭取などをして東京の広尾に居住していたので、小学校を卒業すると上京して、そこからミッシェンスクールの女子学院に通学した。面白いことに父方の祖父勝信にも、また母方の祖父賢一郎にも共に村民が建てた頌徳碑があり、それぞれの村に今も残っている。

両親が成人する頃は、おそらく高知という新しい名より土佐の方がまだ馴染みやすかったであろう。家の中では郷里のことは土佐と言いつつわされていた。

昭和三十五年頃だったと記憶しているが、両親の結婚五十年を祝う金婚式の席上、親族縁者を前にして父の挨拶があった。その一節に「二人

が初めて顔を合わせたのは結婚式場で向かいあって座った時でありました。その時新郎は二十八歳、新婦は二十歳でした」という話があった。今では考えられないことであるが、当時としては二人にとってそれが極く自然であったのであろう。

その両親も今は亡いが、私達子供から見れば模範的な仲むつまじい夫婦であった。母はそれ程でもなかったが、父は誰が聞いてもすぐ分かる土佐言葉のなまりが強かった。そのせいか土佐言葉で話している老人の声を耳にすると、今でも父を連想して懐しい想いになる。

二人共成人すると共に郷里を離れ結婚後も海軍士官であった父の職業柄、太平洋戦争が終わるまで郷里に住まうことはなかった。それだけに郷里への想いが日夜つづっていたのであろう。私が少年時代を過ごした湘南の家では、何かという土佐のことが話題になった。食卓に鯉節が絶えたことはなかった。初鯉の季節になると母は必ず裏庭で、「たたきにはこれが一番」といって麦藁を焚いて鯉の切身をあぶった。はつぶしも季節になれば食卓をにぎわし、うるめも大形で、炭火で焼くとふつくら油をしたたらす類のものがいつも土佐から送られてきていた。父方や母方の親戚も入れ代わり立ち代わり

上京する度に、何日か我が家に泊まった。そんな時のお土産は土佐のかまぼこ、ケンピ、大粒などで、家中にあふれる笑声や土佐言葉を耳にしなから土佐の味を味わった。

文化とはある地域の一群の人間集団の生き方、すなわち彼等が身につけた行動様式とか態度あるいは物質的なもの全体を意味しており、親から子へ祖先から子孫へと学習により伝承されてゆくものであるという。還暦を何年か過ぎた今、振り返ってみると私にとって土佐の文化は極く断片にしか過ぎないかも知れないが、両親を通して私の血の中に確実に流れているように思える。

父に似て海軍兵学校を卒業と同時に太平洋戦争に参加し、戦争末期には海上特攻に出撃して奇蹟的に生還した私は、戦後建築の設計界に入った。所属していた二百余名の大手設計事務所の改革に乗り出し、結局約半数の百名余で日本設計事務所を創設することになったり、私が副会長をしていた日本の建築界の既成団体を解散させ新しい時代要請に対応した新しい団体、新日本建築家協会の設立に奔走する羽目になってしまふなど、反権威主義的「いごっそう」の血が私をそうさせているのかも知れないと今更のように思うのである。（株）日本設計事務所代表取締役社長

# 『まごがの図書館』 なごいも開館中

延弘 浜田

六十年七月末に『まんがの図書館』を開館した所「オヤ、これは珍しい」と思われ、報道関係の取材をよく受けましたが、自宅の二階を改造して本棚を作り、手持ちのマンガを並べただけという、いわば貸本屋のようなものです。

二十歳の頃、『パフ』というマンガ専門誌で奈良県の「飛鳥マンガ図書館」（当時収蔵本十萬冊）の存在を知り、自分もやりたいと思ってきましたが、ある程度条件が整ったので二十七歳の時に開館しました。老後にのんびりとはなく、若いうちに始めたかったです。一応「図書館」なので入館（二百五十円）が原則ですが、一冊三十〜五十円で貸し出しも行っています。低料金で様々なジャンルのマンガを提供したいため、新刊よりも中古やもらいものの本が多く、「まんがの博物館」などと呼ぶ

人もいます。現在、蔵書は六千冊で利用者の約九割が女の子ですが、様々な人達のニーズに応えられるよう、行く行くは三万冊くらいに増やしたいと考えています。

マンガというと、親御さんの中には顔をしかめる方もいます。「うちの子はマンガばかり読んでちっとも勉強せんから、行っても貸さんようにしてくれ」と言われたこともあります。しかし、子どもは昔も今も楽しい遊びに熱中するものです。遊びと言えど外で走り回ることだった昔に比べて、今はマンガ・ファミコン・ローラースケート等々と遊びも多様化しています。マンガはその一つに過ぎません。だから親はむしろ「お前が自由な時間にマンガを読もうが何をしようがかまらん。ほしいものがあるんやったら買うてき。何ならお父さんいっしょに行こうか？」

でも今は〇〇せないかん時間やから、それが終わってからや」と、うまく自分をコントロールできる子どもになるように、導いてやるのが大切だと思えます。ヒステリックに頭からだめだ、いかんと言っただけでは子どもは成長できません。

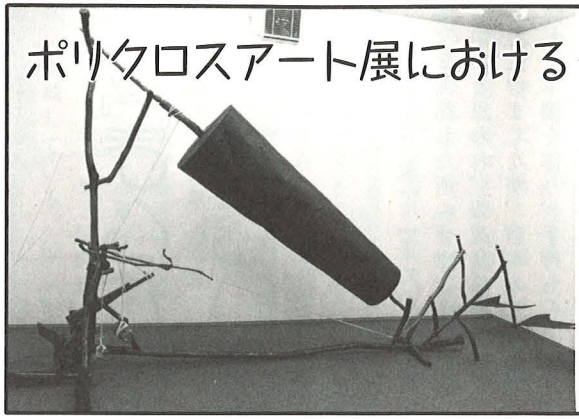
マンガは否定的な捉え方をされがちですが、子どもがマンガから得るものは大きいと思います。マンガはセリフが大事ですから振り仮名の多い漢字は聞いて覚えようとします。どうしてこの場面が面白いのか、悲しいのかじっくり考えもします。しかし最近、子どもがシリアスな話を違和感なく受け入れるのは驚かされます。やはり子どもでも感覚は大人なのです。頼もしいような、少し気味が悪いような複雑な気持ちです。現在、こうしたマンガ体験をした世代が大人になり、親になっています。親子でマンガを読む時代になりましたから、マンガは今後も確固とした位置を占め続けるのではないでしょうか。

といて図書館がマンガを扱うことには賛成しかねます。マンガはあくまでも娯楽です。それに安価ですから子どもでも買えます。ですから公共の図書館には、個人では高価で買えない百科事典とか機械の修理方法などの資料や専門書を置くべきです。

マンガなら、のらくろの全集等の一般では手に入りくいものを揃えてほしいものです。

高知からは、横山兄弟・やませたかし等の大御所的存在から人気作家弓月光・まさき輝など数多くのマンガ家を輩出していますが、高校のマンガ研を中心に若い人達の活動も盛んです。当館の利用者の中にも、読むのが好きというだけでなく、プロになりたいという学生もいます。今年、高知でマンガフェスティバルが開かれるそうですが、従来の講演・コンテスト・展示方式ではなく、マンガの中心となる若い世代にまかせ、次に続く若手マンガ家を育てる土壌づくりの一大契機となるイベントにしてほしいと思います。第一線のマンガ家の実際の仕事ぶりを見せるとか、中・高生の情報交換・討論の場を設けるとか企画はいろいろ考えられます。とにかくマンガ世代の意見を十分取り入れて頂きたいと思えます。

マンガは所詮娯楽ですが、読む側の考え方・見方によってそれぞれ違ったインパクトを与えてくれます。マンガを読む面白さは、その人固有のもので、ですから私は、肩ひじ張らずに一生付き合いたいし、子どもたちには本と情報交換の場を提供し続けていきたいと思っています。（まんがの図書館マイ・ロード館長）



# 現代美術の 動向(下)

門田 修充

私達を取り巻く種々の状況は、決して容易なものではありません。多くの心有る方々のお叱りを覚悟であえて言うならば、我々の文化的水準は——ほんの一握りの人々を除いて——どこからどう見ても、多くの点において、多分あまり高いものであるとは言い難いと思われれます。今更そのことを、とやかく言ってみても始まりません。だから我々は新たに、我々の文化だと呼べるものを創造しなくてはなりません。

そんな気運の中から、今度の『ポリクロスアート展』は実現可能となったのかもしれないと思います。

三月十七日(木)より二週間の予定で『ポリクロスアート展』というタイトルの現代美術展を開催することになりました。この展覧会の話の発端は、昨年の初め頃だと思えます。藤崎幸雄氏(高知西高教諭)が、県立郷土文化会館で展覧会を開くことができるかもしれないという話をもってきたことに始まり、それから間もなく、開催可能ということになりました。早速どの様な展覧会を目指すのか、人選・スペース等の検討がなされました。展示スペースは、県立郷土文化会館の二階ということが決まっています。そこに、できるだけ充分な広さで、ゆったりと作品を置きたいということになり、結局、

出品者は二十五人前後を限度としました。

次に、誰に出品を依頼するのかわかることですが、これは既に当初から話し合っていた、できるだけ今日の的な問題意識を持った仕事をされている方、またいわゆる前衛的な作品を発表されている方の中から、四国四県と瀬戸内圏(大阪を含む)の三十人余の方々に、声をかけることになりました。そして、総勢二十八人の兵達(つちもの)が快く集まって下さることになりました。お呼びしたい方はほかに随分沢山いたのですが、種々の事情で、遂にそのすべての方をお招きできなかったことが、今は残念です。

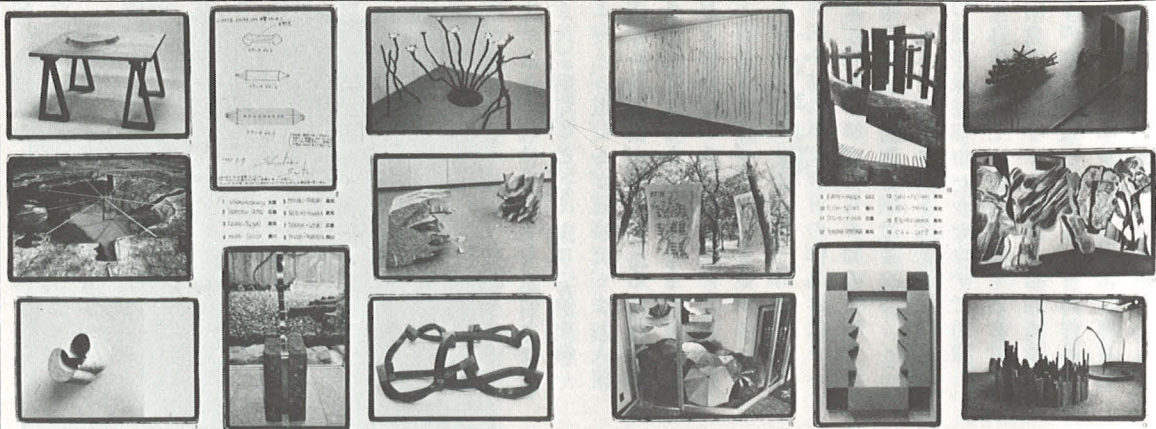
さて、こうして集まって頂くこととなった方々も、いわば孤獨な一匹狼として、各人各様、異なった方向へ、あるいは銘々自己の信ずる命題に向かって、制作活動を続けている兵達ばかりです。それは、二十八の極が存在する様なものです。これを十把一絡げにして、この様な展覧会などと言いつくすことは至難の業で、私などの力の及ぶ範囲ではありません。ただ、前号にも少し書きましたが、松山でのガラクタ展の様なものになろうかと思われれます。ちよつとオーバーではありますが、壮絶なガラクタ展でありたいと願っています。お互いに火花を散らし、

そのエネルギーは四方八方へと放電し、その熱気で多くの人々を巻き込み、感電させるような、そんなガラクタ展になれば大成功ですが。とりわけ現代美術は、宿命的に不評(オルテガ著『芸術の非人間化』より)であり、また難解だとしても……。

しかし、幸いにもこの高知においては、私の知るかぎり、現代美術を応援して下さる人々に少なからず恵まれています。その応援に少しでも応えられるような、また私達の生きている呼吸が伝わってゆくような、少なくともその様な展覧会でありたいと考えています。

最後に、かつて二十余年前にも、『南日本現代美術展』という現代美術展が、濱口富治氏、高崎元尚氏等を中心に開かれました。その時、私はまだまだ何も知らない青二才で、そうした大がかりな前衛美術展に接した最初でした。美術の色々のありかたを目の当たりにすることができ、心躍らせて見たことを、今でもはっきりと覚えています。それが多分今日の私を形成したもとになったのではないかと思えます。そして今また自分達の手でそれに近い展覧会を開くことができるなどは、その時、夢にも考えられなかったことです。

ポリクロスアート展実行委員会  
土佐 高等 学校 教諭



**POLYCROSSART'88** 1988: 3/17-31  
高知県立郷土文化会館2階展示室  
produced by 高知県立郷土文化会館(財)高知市文化振興事業団  
directed by ポリクロスアート展実行委員会  
大人 220円  
中高生 90円  
小学生 40円



ものづくりの  
雑感

永吉 知美

私は「ものづくり」をしています。今、私の課題は、あらゆるものに感応できる心を持ち続けることももちろんですが、「お金」です。私の創ったものに対する値段です。

私は私の創ったものを広く色んな人にそばに置いて欲しい、その為にはまず買って頂きたい。いやな意味でなく、多かれ少なかれどんな人もお金を払うという行為には真剣にならざるを得ないと思うのです。お金を払っても欲しいくなる、それが私の創ったものに対する本当の評価だと思えます。

私は作家の制作のお手伝いをさせて頂いたことや、デザイナーとして量産物に携わったことがあります。その「ものをつくる」という中の両極の世界を経験して強く感じたのは、「私のめざしているものとは違う」ということでした。機械で作ったものが侮れない存在になったデザイナー時代に思い知らされはしましたが、やはり手を通して創つ

たものには独特の味があります。もちろん手で創ったものをいくら安く出すといって、創り手が機械のようになっでは終わりですが。

また、精魂こめてじっくり創り上げても、一般の人にとって頂けない額になれば、よくて美術館行きで(創り手としてそれはそれで全く嬉しいことです)、そうならば見るだけで触れて感じてもらえないというジレンマがあります。身知らぬ人と私を繋ぐのは、まず私の創ったものをお金を出して買って下さるという行為であり、そして日常の生活のふとしたところでいろんなことを感じとってもらおうということだと思えます。

今、私の創ったものを置いているお店の方に「自分が買える値段で創りなさい」と言われています。私はこの言葉を大きく捉え、お金がないから安いものしか創らない、お金があるから高いものしか創らない、ということではないもの創りをしていきたいのです。

価値と値段が合うように自分の創ったものに値段をつけることは、まず私自身が生きたお金を使うことができるステップになります。そして一番大切なこと——自分の創ったものが自己満足に終わらず、人に通じ色んなことを伝えることができるものになっていく——に繋がることだと思っています。

(色んな素材を人の手を通してならよりよく生かしていくのが好きな染織屋)

# 地中海の光の中で ガウディを見た

山崎 啓一

サグラダ・ファミリア教会



## グエル公園

ラテンの民はアモール(愛)とファミリア(家族)とアミーゴ(友)を第一と考え、遊び心が旺盛で、より人間的でより個性が尊重される民族であり、とてつもない天才を生み出す底力を秘めている。建築家アントニオ・ガウディは、ピカソと並ぶスペインが生んだ天才である。昨年九月に同国を訪ねガウディの作品群にまみえ、目から鱗が落ちる程の新鮮で素晴らしい感動を体験できた。

ガウディはフランスとの国境近くの国際保養都市バルセロナで活躍し、一九二六年七十四歳で没するまでサグラダ・ファミリア教会を始め数多くの作品を残している。その作品群の中からグエル公園とグエル邸を紹介したい。

グエル公園は田園都市開発事業として実施されたが、当時としては不便な立地条件のためか一軒も家は建てられず、事業としては失敗した。結局、開発された二十二ヘクタールの用地はバルセロナ市に寄贈され、今日では公園として利用されている。当初計画が宅地開発事業でありながら、現存する構造物は曲線を多く取り入れ、視覚的造形美により重点を置いて設計されており、さながら公園化されるのを意図して計画されたかのように皮肉である。

同公園へはピクニック気分で昼食を持参して訪ねた。地下鉄のレセプション駅で下車し、高まる期待を胸に

石積みの中に居ると、座禅を組んでいるような安らぎを感じる。これはもう胎内感覚と言っても良いだろう。階段、ベンチ、そして石積みによる生命を与え、表現力を与えたガウディはまさしく天才である。

このグエル公園を総括すると、宇宙的な異次元感覚と胎内の安らぎである。

## グエル邸

奇抜な作品の多いガウディだが、こんなにクラシックな面もあるのかと認識を新たにするのがグエル邸である。外観は屋上の宇宙へのメッセージともイスラムのモスクの塔ともとれる煙突を見ない限り、重厚でノーマルな造りで、よくよく注意して窓の曲線の使い方や、凝った鋳物細工を見ないとガウディの作品だとは分かり難い。

落ちついた内装そしてシックな調度、内部に居ると時間の流れまで忘れてしまいそうな安らぎに、巨匠の意図したものが分かりそうな気がしてくる。彼のデザインした椅子に座り内部をながめるだけで胸がいつぱいになってくる。建物を見てこれ程感動するとは思わなかった。

偉大な建築家は芸術家であり、彼の造った建築物は芸術作品である。結局、午前中は感動の連続で冷静に

観察出来なくて、昼食後再度訪れる事にした。受付の守衛にこの感動を伝えると、「夜七時まで開いているから、もっと感動しにおいで」と喜んでくれた。

昼食後、高感度フィルムを持って再度訪れ、撮影しながら丹念に見てまわる。これがガウディだと思わせる優しい曲線の階段の横には、二階から四階まで吹き抜けになった広い空間を持つサロンが有る。天井はドームの造りで、星座のように点点と採光していて宇宙へのつながりを感じる。そして柱や壁を装飾している鋳物のツタや鳥やシャンデリアの緻密な細工の見事なこと。



十五分間程坂道をたどると、キノコのように童話的な塔のある入口へ着いた。巨匠の凝りようがうかがえるシュロの葉をデザインした鋳鉄の門より入園すると、見る者にほのぼのとした安らぎを与えてくれる優しい曲線の階段と、おとぎの国のようなセラミックをモザイクした擁壁に目を奪われる。階段はX字状に分岐しており、交点の上下には太陽をモザイクしたベンチやイグアナの像があり、ガウディの遊び心が伝わってくるようだ。

ガウディの作品に接する喜びをかみしめながら階段を上ると、当初の宅地計画で市場として建設した古代ギリシャ風の列柱が並ぶギャラリへ出た。天井は皿状に中央部が窪んでいて、そこに名物料理や海産物がモザイクされており、タコのミニチュアまでぶら下がっているのには、思わず吹き出してしまった。市場として計画した所以であろう。

さらに階段を上り詰めると、街並みの向こうに地中海の望める二百メートルの連続したベンチのある、市場の屋根をも兼ねた人工広場へ出た。このベンチは多彩色のモザイクしたタイルで装飾してある。そのモザイクも方形のタイルをわざわざ砕いて組み合わせであり、ベンチのどの部分をとってもどれと同じ模様は

それにしても、この天井装飾の凝りようはどうだ。部屋ごとに違う木造彫刻の天井に感嘆の声をあげる。石造りの西洋建築の内部を飾るこの東洋的な天井は何なのだ……。

その後、グラナダのアルハンブラ宮殿を訪れ、答えが出た。アルハンブラの内部を彫刻によつて壁といわず天井まで飾るイスラムの建築様式を、グエル邸の天井に表現したのであろう。

## むすび

その他ガウディの作品には、地中海の波のうねりを感じる「ミラの家」、骸骨のような「バトリヨの家」、

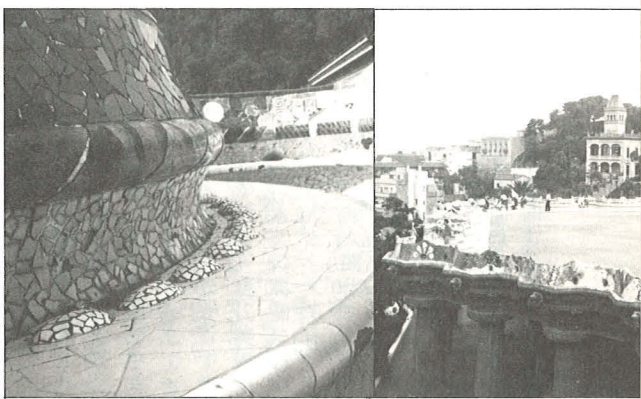
ないから驚きである。さて座り心地は、腰骨部分に半円形の突起が当たり背中が伸びて実に安楽である。この極めて個人的かつ人間工学に基づいたベンチに、西洋の椅子の文化を感じた。見上げると太陽がいつぱいの青空が広がり、広場としての演出効果は満点である。ベンチでくつろぎながら昼食をとり、食後のシエスタ(昼寝)を決めこむと陽に火照った膚に冷たいタイルの感触が気持ち良い。結局、タイルのベンチは地中海の風土に合っていることが実証出来た。

ベンチより続く石積み擁壁は、オーバーハングさせた回廊になっている。この優しい曲線で構成された

そして彼の死後今日までいまだに工事を継続して、完成は二百年後とも言われている巨大な石造寺院の「サグラダ・ファミリア教会」などがある。どの作品を見ても我々に訴えかけるものがあり、生命力まで感じてしまうから不思議である。

また、どの作品も細部で見ると奇抜であり狂気をも感じるが、全体をながめると調和がとれ安らぎを感じるのは何故だろうか……。それはガウディの精神が歴史的普遍性をもつからだと思われる。それに、ガウディは宇宙の何たるかが分かっていたのでは……。

(高知市みどり課)



グエル公園：人工広場とタイル装飾のベンチ



(上)グエル公園の回廊：異次元感覚と胎内の安らぎ  
(中)グエル邸：この天井ノ  
(下左)ミラの家  
(下右)バトリヨの家

## 都市の時代とまちづくり

現代は都市の時代である。農村でさえも都市化の現象が進んでいる。この時代に何が欠けているか。端的に言う「トータルなイメージがない」「全体を統合化するものがない」ということである。

まちづくりや地域づくりには、全体を眺めてみるという視点が欠かせない。よく中央集権と言われるが、今日の実態は中央の各省庁は分権で、集権のできるのはむしろ地方である。高知のことを中央が考えてくれるというのは大きな間違いで、高知のことは高知で考えなければならぬ。統合化できるのは「地域」で、地域が主体性をもって取り組まなければならない。

かつての日本は、それぞれの地域がその地域特有の表情を持っていた。しかしいま、日本全国が東京の亜流になっている。ただつくればよいということ、駅前も文化施設も同じ様なものができ、どこもかしこも画一化し、本来の意味で面白いところが少なくなっている。いまだ切なのは、東京に無いもので高知にあるものに目を向けること。自然でも歴史でも物語でもよい。他にないものを見つけ、それを生かすことである。

これからの時代は、都市と都市の競争関係がますます増幅される。同じものを比べるというのではなく、個性の競争である。

都市の個性は、  
風土×歴史×人の営み

で表される。

個性はあると思えばあるし、無いと思えば無いという性質のもので、それをどう目覚めさせ、発見し、生かすかが鍵となる。

高知の人は気が付いていないかも知れないが、太平洋

ア教会を手がけたガウディは、自分が仕上げるなどとは思ってなく、後の建築家が手を加えてさらに良いものにしてくれればよいという考え方で、いまなおつくる仕事が続けられている。またよく知られるサン・マルコ広場は後に続く人々が常に「周りとの調和」を考え、時間をかけて作り上げた人と時間の集積の傑作である。ふつう、自治体や行政の仕事は単年度主義で一つの事業を行えば終わりということになる。しかし、まちづくりは違う。「本当に高知に必要なことは何年かかってもやる」という熱気が無ければ高知のまちは良くならない。時間をかけて、まちの質をよくしていくことである。

### まちづくりに求められるもの

都市を美しくしようと思っても本当にやる気がなければできない。日本の建築家には「まちを見てくれ」でなく「おれの作品を見てくれ」というのが多い。それぞれ勝手に自分の主張をするようではいいまちはできない。

行政の各部署は、全体よりも、まず自分の仕事がある。よくいくことが最大の関心事で、せっかくなかった計画を止める者は悪者とされる。しかし強く反対を述べると、要するにやる気があるからである。

「みなとみらい21」の名で呼ばれる事業をはじめ、横浜の六つの戦略的プロジェクトは今のことごとく実を結んでいるが、当時は横浜市の方では無理といわれ、障壁だらけであった。

現実を変えるという行動は、必ず多くの反撃に会い、様々な困難に遭遇する。そこで必要なのは現実を動かしてゆく様々な手法である。

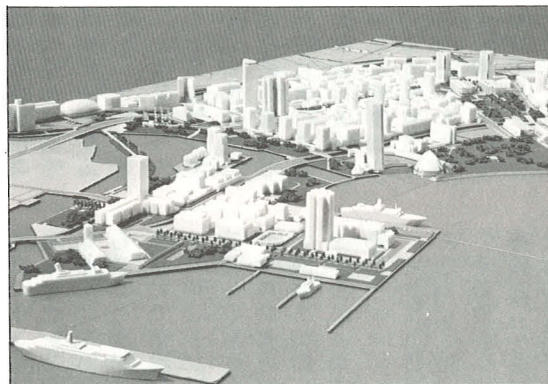
現場をよく「調査」し、傾向や問題点を「分析」し、他の実態や問題の所在や本質を「研究」する。その上で、現場にあった「構想」や「戦略計画」「政策」を立ててゆく。

## 連載 ■ 〈街づくり〉の現在 最終回

# まちづくりの思想

田村 明

〔法政大学教授〕



「みなとみらい21」地域の完成予想模型

がこれだけ眼前にあるというのは、高知にとって大変な個性で、それに続く浦戸湾は高知の宝と言ってよい。古くは「河内」といわれた天与の鏡川・浦戸湾・太平洋をどう生かすかは、高知浮上の大きな鍵である。

### まちづくりは文化づくり

はやりすたりのあるものは長続きしない。時代が変わっても変わらないもの、生活のにじみ出た文化を感じさせる個性的なまちが、これからは魅力を持つてくる。工業中心の時代では同じものをつくり、いいところと悪いところの差がはつきりした。しかし、いまや単なるものづくりの時代ではない。デザインや、人の知恵、はつきりと目には見えない価値（ソフト）の加わったもので勝負する時代である。

住民がいい状態で暮らして、いいソフトを生み出すまち、芸術家や彫刻家・職人などのクリエイティブな活動が活発で人々が生き生きと住めるまち、そうした文化の香り高いまちが産業都市となってくる。

文化は一朝一夕にはできない。これからのまちづくりは「文化づくり」そのものではない。ものをつくるのにも文化的なつくり方が求められる。地域の文化をどう守りどうつくりか、「文化のまち」「文化都市づくり」こそ今日のまちづくりの課題である。

私が横浜市で仕事をした昭和四十二年当時、緑とか都市景観をよくするとかは贅沢なことといわれ、ほとんどまだ認められていなかった。しかしいま、都市の美しさ・アメニティ・個性・みどりなどは、当時反対していた中央省庁が進んで強く主張するようになっていく。

ヨーロッパの都市では数百年かけてつくりあげているまちがいくつもある。バルセロナのサグラダ・ファミリ

構想や政策を具体化するために必要な「事業」を企画し、これを「実行」する。そのための「ルールづくり」や「シクミづくり」も必要となってくる。すぐれたまちづくりには、意志と知恵と行動の三つが必要である。

意志は、まちを何とかしなくてはならないと思うところから始まる。意志はまちづくりの発想となり、まちづくりの意義に目覚めさせ、そしてまちづくりの思想を生み出す。

まちづくりを具体化するためには知恵がいる。当事者だけで十分な知恵がなければ、広く多くの人の知恵を活用すればよい。また、知恵のある人々を発掘し育ててゆくことも重要である。

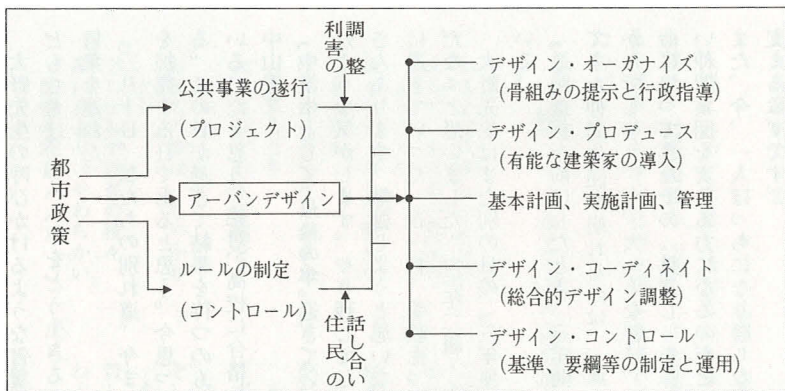
最後は、積極的で英知のある行動である。行動なくしてまちづくりはできない。そこで大切なのは一人を始めてもよいが、たった一人ではできないということ。まちづくりには、真剣に取り組む人間が五人要るといわれる。それも違ったタイプの人々がよい。異質の人々を取り込み輪を広げながら協働することによって、個性的で魅力あるまちがつけられる。

「まちづくり」という言葉は非常に柔らかない。「都市計画」「地域開発」といった言葉と違って、「まち」を市民のものにした。まちはみんなで作るもの、まわりのことを考えて協働してつくるものである。それだけに自治体の果たす役割は大きい。単発の一貫性のないタテ割り事業では、まちづくりはできない。各部署がタテ割り、独善的に行動してきたらば行政を、「まちづくり」という一つの求心的なものにしてゆく総合化が必要である。

自治体は、いわば市民の事務局である。いま、自治体に求められるのは、実務的な総合行政ができるシステムをつくりあげることである。

### アーバンデザインの仕事

横浜のまちづくりでは「アーバンデザインチーム」が大きな役割を果たした。『都市ヨコハマをつくる』中公新書より



# こずえ 空はに

竹内 直人

人生に春ほどいいものは無い、といったのは永井荷風であつたかと思う。  
今年の冬は暖かな日々が続いたので、私のような寒がりには随分とたすかった。

勤めの学校(介良中)の周囲には、イチゴを栽培しているビニールハウスがあちこちにあるのだが、近づくに甘酸っぱい香りが流れてくる。冬のあいだ、夜は電照栽培のあたりで、これらハウスの光景はメルヘンのようなムードが漂っていたのだが、季節はやがて過ぎ、イチゴも花房の開花を終え見事な実をつけている。

学園は旅立ちの季節である。中学三年生は、中学生になって九〇〇日を越す日々に学んできたことのまとめの季節である。

介良中学校の三年学年主任は、「泣き虫先生」大野一郎さん。  
『三年便り』(一八〇号)に、こう書いている。

卒業式が近づくと、思い出すことがある。

前任の城東中学校のことだった。

ある日、学校の玄関あたりを生徒たちと一緒に掃除していると、乳飲み子をつれた若い女性が入ってきて、「S先生はいますでしょうか」と聞く。その女性を職員室に案内すると、その場にいあわせた数人の先生が、期せずして、「いやあ、K子さんじゃないか!」と驚きの声をあげた。

S先生は彼女の中学三年のときの担任。K子来校を開き、体育館からスッ飛んできた。

『お前、生きちゃったか……。ようきてくれた……。』とS先生の声はうわづついている。

その学校に長く勤めている先生方の話をまとめると、こういうことなのである。

K子さんは、城東中を数年前に「卒業」した女性なのだが、三年生の後半から家出などの問題行動がつづき、三月の卒業式にも現れず、行方が分からないまま今日まできたのだという。

そのK子さんが学校にやってきた理由というのは、『卒業証書をもらいたくて』。

『そうか、お前はいつかかならず証書を取りにくると、ぼくは信じちよつた』とS先生は、耐火書庫のなかから、一枚の卒業証書を取りだしてきた。

彼女を知る校長先生の配慮で、数人の教師が校長室に集まり、臨時の「卒業式」が開かれた。四年間、書庫のなかで主を待っていた卒業証書はそのとき、今は一人の子の母親となった十九歳の女性に確かに手渡された。

『この子が成長して、お母さん、中学校の卒業証書はどうしたか、と尋ねられたとき困ると思つて……。』

K子さんにとって、心の荷となつていた卒業証書。そして卒業式。自己変革を遂げた四年後のK子さんと、そ

『とうとう第三学期、三年生の最後の授業でもある卒業式へむかつての出発です。(中略)どんなときでも、君たち同士、お家の方々と君たち、そして君たちと僕ら教師は、たえず希望を語りつづけ、考えとおしてきたはずです。(中略)それらの生活や学習の土台にたつて、今、君たちは、「さらに一步を」ふみだそうとしています。そしてその「一步」は、さらに次の「一步」をふみ出させることですよ、きつと』

大野先生の呼びかけるような言葉に比べて三年生の子どもたちは、『八八年をどう生きるか』というテーマで言葉を連ねた。

『三月十日。私たちの別れ道。今まで頑張ってきたことを披露する日であると思う。今思つても緊張しそうです。この日が過ぎて結果を待つのも、ドキドキ緊張しているのだと思う。絶対、高校に合格したい』(三年二組・中山恵)

『中学生として、最後の年。過ぎていくのがとても早かつたような気がします。やり残してしまつたことが、たくさんあります。勉強しようと思ひながらも、実行できずに過ぎていつた一日一日。受験生ってほんとにつらいんだなあと思ひました』(三年二組・小笠原広恵)

大野先生はまた別の日の『三年便り』で、こう書いている。  
『進路選択を前にしたとき、三年間一生懸命、築きあげてきた仲間集団が崩れるのは、「遠い見通し」を見失うからでしょう。今、大へんな時に、やはり一方で一生懸命に培ってきたその「見通し」を忘れないことが、美しい仲間集団を支える力になるのだと思います。その力がまた、今、一人ぼっちになり勝ちな君たちを、しっかりと支えるはずですよ。』

ばにいてほほ笑んでいる赤ん坊のイチゴのようなほつぺたが印象的だった。

人間にとつて卒業とはどういう意味を持つのであろう。詩人、村野四郎の『樹』という作品は、この季節になると読みかえす、私の大好きな詩である。つばやいてみたい。

## 樹 —卒業する子へ母の歌える

村野 四郎

おまえが入学したときは	このゆたかな恵みに
まるで かよい苗木の	心から感謝しよう
ようだった	おまえは まだまだ大き
枝もなく そして葉もな	くなる
かつた	やがて 花をさかせるだ
けれどもきょう おまえ	ろう
を見るとき	こずえは空にひろがるだ
大きなおどろきに胸をう	たれる
たれる	ろう
おまえの幹は しつかり	そして 深々とした お
とし	まえの茂みは
さしかわす知恵の枝々	数しれない小鳥たちの
風にそよぐ やわらかい	ねぐらになるだろう
感情の茂り	ねぐらになるだろう
おお この美しい成長は	おお そのとき
だれがくれた	大きな おまえの樹のか
わたしは おまえといっ	げに
しよに	どんなに美しい夢を
	わたしは結ぶだろう

「中学生・それぞれの時」竹内先生の担当分は今回で終了致します。有難うございました。

## 高知市近代年表 (十)

- |       |             |   |
|-------|-------------|---|
| 4月    | 大正十一年(一九二二) | 土佐農工銀行、日本勧業銀行に合併され同行の高知支店に新市橋(新市町・南新町)竣工、工費三千六百元    |
| 5・16  |             | 朝倉連隊、シベリアより帰還                                       |
| 6・10  |             | 土佐電気鉄道、土佐水力電気と合併し土佐電気株式会社設立                         |
| 8月    |             | 監獄署を刑務所と改称  |
| 10・30 |             | 小幡豊治、知事に就任  |
| 10月   |             | 大正十二年(一九二三)   |
| 1・8   |             | 海軍大将島村速雄逝去(八四)郡制廃止                                  |
| 4月    |             | 農業補習学校教員養成所(後に青年師範学校に統一)、県立農業学校に併設                  |
| 4月    |             | 高知市職業紹介所設立  |
| 7・7   |             | 関東大震災おこる  |
| 9・1   |             | 藤岡兵一、知事に就任  |
| 9月    |             | 高知銀行・土佐銀行が合併し四国銀行創立。資本総額六百万円                        |
| 11・1  |             | 板垣退助銅像除幕式   |
| 12月   |             | 株式会社野村組設立   |
| 12・5  |             | 大正十三年(一九二四)   |
| 3月    |             | 国鉄土讃線須崎〜日下間開通                                       |
| 4・25  |             | 土佐交通協会創立  |
| 5・10  |             | 第十五回総選挙、護憲三派大勝(憲政会百五十一、政友会百五、革新倶楽部三十、政友本党百九、無所属六十九) |
| 9・30  |             | 土佐協会、育英事業を委託される                                     |
| 11・15 |             | 土讃線須崎〜高知間開通   |
| 12・8  |             | 高知鉄道後免〜手結間竣工  |
| 1・1   |             | 大正十四年(一九二五)   |
|       |             | 高知市、旭村を合併   |
| 3・27  |             | 高知市、都市計画法指定を受ける                                     |
| 4・19  |             | 高知市と高知水産会が共同で九反田生魚市場開設                              |
| 4・24  |             | 杓田の上水道竣工式を挙げる、給水は4・1より逐次実施                          |
| 5・1   |             | 天神橋、コンクリート新橋として竣工                                   |
| 5・5   |             | 普通選挙法公布、男子の普通選挙が実現                                  |
| 5・12  |             | 治安維持法実施   |
| 6・10  |             | 大町桂月逝去(五七)  |
| 11・5  |             | 国鉄土讃線高知〜土佐山田町間開通                                    |
| 12・28 |             | 西本直太郎、市長に就任   |
| 1・25  |             | 大正十五年(一九二六)   |
|       |             | 昭和元年  |
|       |             | 高知市、下知町と潮江村を合併                                      |
|       |             | 県薬剤師会設立   |
|       |             | 県歯科医師会設立  |
|       |             | 高知市役所内に職業紹介所を新設                                     |
|       |             | 幅十間余の高知駅前道路完成                                       |
| 7月    |             | 県体育協会設立   |
| 9・15  |             | 佐藤復三、知事に就任  |
| 9月    |             | 高知市誌、改訂再版を発行  |
| 11・7  |             | 山内容堂銅像除幕式   |
| 11・25 |             | 天皇逝去(四八)、昭和と改元                                      |
| 12・25 |             | 昭和二年(一九二七)  |
| 4・1   |             | 県方面委員設置   |
| 5・1   |             | 高知市、小高坂村を合併   |
| 5月    |             | 加瀬清雄、知事に就任  |
| 6・1   |             | 憲政会・政友本党、合同して立憲民政党を結成(総裁浜口雄幸)                       |
| 7・14  |             | 県獣医師会設立   |
| 8・22  |             | 社会民衆党高知支部発会式  |
| 8・26  |             | 川島正件、市長に就任  |
| 11月   |             | 土佐保勝会設立   |

# JCC全国大会に向けて

木村 祐二

一九八八年四月、国家百年の大計と言われる瀬戸大橋が開通し、四国が島でなくなる。また経済的、文化的な面である時は障壁、ある時は擁壁であった四国山脈に大きな風穴があき、あと三、四年もすれば一本の太い動脈で中国・関西圏と繋がることになる。

四国新時代と称してマスコミも連日のようにこの話題を取り上げていく。

折しも、高知県はこれから一層激しくなるであろう地域間競争での生き残りをかけて、全国へ向け『国民休暇構想』を発信した。

行政、財界、県民市民をあげてこの構想に取り組もうという訳であるが、残念ながら具体的な戦術は未だに見出せない状況である。こうした中で、我々は(社)日本青年

会議所第三十七回全国大会を開催する。

直接経済効果十、二十億円、経済波及効果五十億円とも言われるこの大会を単に一過性のイベントとして、この経済的側面で捉えるつもりはない。

全国から来高する一万人の人間をJCCだけでなく、関係業界、市民共々受け入れる中で『国民休暇構想』推進の為の具体的な戦略戦術を見つけ出すところが、五年間にわたり膨大なエネルギーと金と時間を費やして誘致運動を進めてきた、この大会の意義目的であるとして位置付けている。

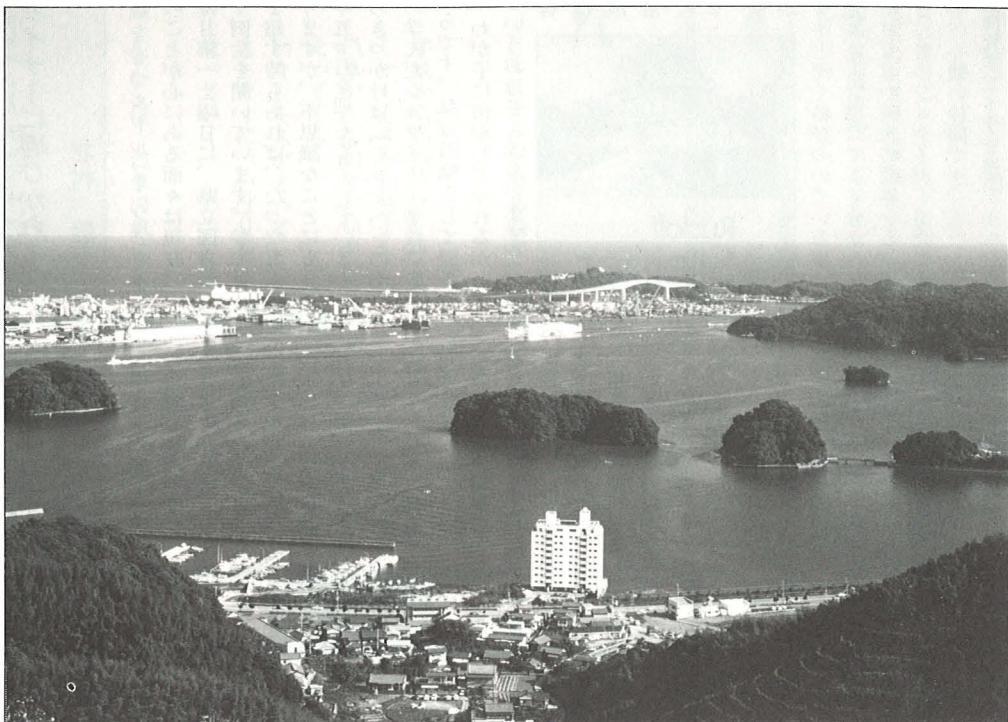
せっかく機会を頂いたので、高知JCCの沿革にも触れながら皆様の御理解と御協力を仰ぎたいと思う。高知JCCは一九五三年戦後の復旧

中山 忠雄

## 浦戸湾

横浜に生まれ、毎日浦戸湾を見て育ってきた私は、この風景が大好きです。時の移り変わり、四季折々の風情など、あらゆる角度から記録するとともに、大切な財産としてこの浦戸湾を残したいと思えます。

## 私の風景



期に、郷土を立ち直らせたいと願う青年達によって、友情・奉仕・習練の三信条をベースに明るく豊かな町づくりを目指して作られた、二十歳から四十歳までの企業人の集まりである。

以来、三十五年の歴史を経て、無医村診療、養護施設の慰問等の対症的な運動から、様々な事業、イベントを通じて地域へインパクトを与え世論を喚起し、行政とも運動しながら地域を変えていこうとする『市民憲章制定』『人間都市高知市を求めの発刊』等の運動へ、さらにはJCCが行うのではなく住民自らが自らの手で自立と連帯に満ちた地域の創造を進める為のヘルパーとしての役割、提言をしていこうといった運動へと、試行錯誤を繰り返してきた。

そして、本年九月二十八日から十月一日にかけて行政、経済界等、様々な分野から熱い視線を受けて、全国大会が開催される。

大会テーマ『ふりーじやきに』ここに人あり。自由あり。青い空、青い海を唱えるのはやめにした。青い空は北海道の方が美しい、青い海は沖縄には勝てないのがある。

幸いにして他県の人は高知に対して坂本龍馬に代表される自由奔放、気宇壮大な人的イメージを、豊かな自

然と同様に抱いてくれている様である。

手付かずの自然と昔のままの人情こそ、我々土佐人の持つ最大の資産ではないだろうか。この資産を生かした形の長期滞在型リゾートゾーンの創造が高知の新しい顔となり得ると考える。

都会からの観光客は日曜日のおばさんとの会話に、高知の人々との様々な接触に旅情を感じるようである。しかし、残念ながら自ら高知を振り返った時、その素朴さ故のホスピタリティ(親切なもてなし)のなさ、純朴さ故の排他的な感情は否めない感がある。

数年前、富山で全国大会が開催され、我々高知JCCのメンバーも参加した。富山駅で降り立ちタクシーに乗った瞬間『ようこそ富山へ』という言葉が運転手さんから聞いた。

富山大会が大好評のもと終了したのは、この一言のせいであつたように感じるのである。

ハードからソフトへという言葉が最近よく耳にするが、まさしく『人』というソフトこそが最大の資源であるといえるだろう。

『ふりーじやきに』ここに人あり。自由あり。

(社)高知青年会議所  
(全国大会実行委員長)

博多から高知に移り住んでまもなく丸五年になるうとして。よく言われることだが、高知に来てまず喫茶店の多さに驚いた。それともうひとつ、お好み焼の店が実に多いという印象を持った。ちなみに電話帳で『お好み焼』の項をひくと、高知市内でざっと百軒あまりの店の名前が載っている。厳密に他の都市と比較したわけではないのか少ないのかは、にわかに判断は



上野 芳喜

つかない。しかし、高知の街でお好み焼を食べるのに苦労することはない。街の規模も違うので一概には言えないが、以前住んでいた博多では、お好み焼の店を探し歩かねばならず、高知とは大きな違いである。

お好み焼をよく食べなれているせい、高知の若い人は実にお好み焼の味にうるさい。これは、かつて居酒屋をやっていたときの経験から言えることだ。手作りピザを売り物にしようと考

えていたが、お好み焼をメニューに加えたとなん、ピザの三倍も出るようになった。わざわざお好み焼を食べに来られるお客さんもいた。味つけやソースの味は、お客さんの意見を聞いて改良を加えた。いわばお客さんが店の『お好み焼』を作り上げたようなものだ。

お好み焼専門店、どの店も独自の味を出そうと競い合っている。若者に人気のあるこれらの店の味は、県外へ出しても十分通用する味だと思う。この土佐のお好み焼の味が、大阪や広島などの『お好み焼先進地』に伍して、有名になっていくかどうか——私はその可能性はあると思う。ただし味に對してのこだわりが必要である。

土佐にはカツオのタタキや血鉢料理など、土佐の風土の中で育ってきた独特の味がある。味にこだわってきたからこそ、土佐の名物に発展したのではないだろうか。グルメブームといわれる昨今、冷凍食品などの普及で手軽にこそこの味が得られるようになったが、それに安住しては発展はない。何事にもこだわりがなければ、その土地独自のものは生まれにくいだろう。

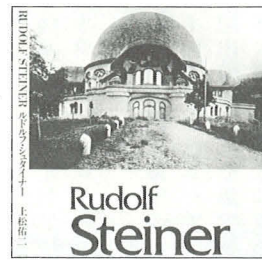
若者が創り上げた高知の食文化のひとつ(少し大げさか)のお好み焼が、広島や大阪のそれと肩を並べ、『博多とんこつラーメン』『長崎ちゃんぽん』のような名物にまで成長するかどうか。さて、皆さんはどう思いますか？

## シュタイナーに導かれて

北村 静子

### シュタイナーの本を読む会

様々な顔をもつドルフ・シュタイナー。彼が心にある面々は現在二十七名。毎月第一土曜日に、県立図書館や喫茶店で例会を開いています。参加者が二十人を超す時もある、たった五人の時もあります。不思議なことに、始めて一年五ヶ月を迎えようとしています。読書会のきっかけは『ミュンヘンの小學生—娘の学んだシュタイナー学校』(中公新書)からです。私は教師として読みましたが、わが子に何がしてやれるかと思つて、というお母さん達もいます。『はてしない物語』『モモ』(共に岩波書店の著者エンデに魅せられてという若い人も。彼がシュタイナーと深く結びついている事は『モモを読む』(学陽書房)でよく分かります。さらにヨーガや瞑想の世界から思想・哲学としてのシュタイナー追究でいらした方も、心強い仲間です。



初めは『神智学』(イザラ書房)から読み出しましたが、まず現実と結びついたシュタイナー観を手探りしつつ探

### 高知中南米音楽愛好会

## 魅力はリズムと熱情の歌

西村勘太郎

中南米音楽(ラテン音楽)の特徴はその多彩さにあります。国により、音楽にもリズムにも様々な変化があるのです。良く知られているアルゼンチンのタンゴ、ブラジルのサンバ、シヨロ、キューバのルンバ、マンボのほかにはメキシコのマリッチ、アンデス地方のフォルクロレ、ジャマイカのレゲエ、ニューヨークのサルサ等々、数えあげればきりがありません。

ラテン音楽は根強いファンを持っています。高知でも十数年前から愛好者の会が活動をしていましたが、私達「高知中南米音楽愛好会」はその流れを汲む形で、今年一月に発足しました。例年は奇数月の第二水曜日に「えるびい」のイベントルームで、レコードやライブビデオの鑑賞を行っています。



ラテン音楽の魅力は何といつてもリズムです。実に様々なリズムと楽器が混ざり合い、聞いていて退屈するということがありません。また歌でも、大半は「恋した、愛した、ふられた」という恋愛を歌ったもので

### 高知ベンチャークラブ

## 地域社会への奉仕を

西森 悦子

私達高知ベンチャークラブは「冒険なことは何事も得られない」をスローガンに、職業を持って活躍している女性が、その職域でさらにリーダーシップを伸ばし、公共問題や国際親善と理解などに関心をもち、奉仕活動を通じて地域社会に貢献しているグループです。全国に三十六クラブが、四国では高知が最初に結成され、各地域で活躍しています。



リカ第2回日本リジョン大会  
CONFERENCE OF JAPAN  
BS OF THE AMERICAS

早朝清掃への参加等を行っています。またくすのき寮の子ども達には日本昔話のカセットテープを第二十巻まで贈ることができましたが、皆さん非常に喜んで下さり、目の不自由な子ども達は点字でそれぞれが手紙を書きました。その手紙に目を通しながら、私達のささやかな気持ちや子ども達には大きな気持ちなんだと思え、会員は皆胸を熱くした次第です。それに施設の子ども達の明るさ、素直さ

### 青春カンパニー

## 生きてますか、いきいきと!

川島 徹也

「いきいきと生きていますか」という問いかけに、すぐ答えられる人はそう多くないと思います。私達「青春カンパニー」は、その問いかけにはっきり「ハイ、いきいき生きてますよ!」と答えられるメンバーになる事を目指して、活動している青年の集団です。

結成のきっかけは、昭和五十八年に高知市の中央公民館で行われた「第一回青春ゼミナール」です。ゼミナール終了後、卒業生が「せっかくなので仲間ができたのに、このまま別れてしまふのは惜しい」と集まったのが始まりです。



活動の内容は、スポーツ面、文化面と多岐にわたっており、会員がやりたいと思うことを何でも実現させていこうと頑張っています。

究を、ということ、今は「シュタイナー教育を考える」(子安美知子著・学陽書房)を読み合っています。私達の生き方を子ども達を育てるやわらかさを、振り返らざるを得ないひとときです。

『モモ』の中の「ゆつくり歩くことが、早く前へ進むこと」と教えてくれる小さな亀のカシオペアの言葉をたよりに、少しずつ読みすすめていく、ささやかなつどいです。

ですが、歌詞の内容は暗くても、根本的なところには明るさがあるのです。そして同じように恋を歌っても、実にストリートで情熱的です。こんなラテン音楽は、土佐人の気質にぴったりだと思ふのがどうでしょうか。

を見るにつけ、健康な子ども達も見習うべき所があるとの思いを強くしました。私達の課題の一つは資金です。そのために「チャリティーダンスパーティー」の手作りバザー等、国際ソロプチミスト高知の方々の力添えも頂きながら運営しています。

主なものは、やはり青春ゼミナール(教養・手芸・料理を含めた文化講座や討論会など)で、青年センターに移ってから、自分達で企画し実行し、広く高知市の青年に呼びかけて開催しています。

## 汽車

江ノ口小学校四年 島村 支恵子

学校からの帰り  
しゃだんきがおりて  
汽車が ものすごいスピードで  
走ってくる  
わたしたちがまってる前を  
えらそうに いばりながら  
走っていく

わたしは 汽車の風にまきこまれて  
すいこまれていきそう

## 風伯

## 88四国シンポジウム

四国は一つ一つでないか。それはさておき、とにかく「四つの国の連携を考える準備会」から八十八日後、「四国霊場八十八カ所のトイレをとおして四国を語り合おう」という「88四国シンポジウム」が開かれた。

準備段階で吟味しただけあって、集まった百五十余名の顔ぶれも、お寺の住職、衛生機

器メーカー、衛生用品メーカー、観光業者、国・県・市町村の行政関係者、大学教授、建築家、商工業者等々、四国各県からの参加者を中心とした多彩なもので、発言者も多岐にわたる、その切り口は多種多様。ひと味違った斬新かつ中身の濃い会となった。

もの水道代に悲鳴を上げ有料化を主張する一番札所の住職さん、現状の公衆トイレの中で如何に悪戦苦闘しているかを実演入りで訴える和服愛用の女性利用者、トイレ借用の予約をとりに苦勞を披露するバス会社の社長さん、視力が嵩じて性犯罪というケースもあるから絶対に覗けない構造をとっているのは法医学研究者。その他、都市計画家・環境心理学者・公衆衛生の立場から等々、身近な問題だけにトイレを巡るありとあらゆる苦言・提言が次々と披露された。

とにかく清潔にして「お接待の心で」と説く精神論も出て、有料・無料については結論が出なかったが、瀬戸大橋開通で四国新時代を迎える今、四国のトイレは現状では駄目であるという基本的な認識では一致したように思う。

この三月、お隣の香川県には民活で五億円のトイレが出現する。さて、国民休暇県を目指す高知は?

(空)



## 第4回高知の映像コンテスト

私たちの郷土は、日々その姿を変えています。新しいものが登場すると、あるものは残りますが、あるものは形を変えたり、消えてゆきます。そこで、第4回高知の映像コンテストは、写真により郷土の変遷をとらえ記録として保存・継承してゆくために、写真展として開催することになりました。

高知に関する記録であれば、撮影対象は問いません。高知の現在や未来を感じさせるもの、無くなってしまいかもしれないもの、既に消えてしまったものなど、記録に残しておきたいもの、写真をお寄せ下さい。また、明治、大正、戦前、戦後の高知を伝える写真をお持ちの方も是非ご応募下さい。

同時に、ビデオの部でも同じテーマで作品を募集します。

- テーマ「高知を記録する」
- 作品受付 3月14日(月)～3月19日(土) 午前9時～午後5時(郵送も可)
- 場所：事業団事務局
- 展示

入選作品の展示とビデオの公開を、市民図書館集会所で行います。

期間：3月22日(火)～3月27日(日) 午前9時～5時(最終日は12時半)

● お問い合わせ先

高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町5-2-3

電話 0888-173-4365

応募要項は事業団までご請求下さい。

写真展  
高知の記録

主催  
高知市文化振興事業団  
高知市民図書館集会所ライブラリー

作品募集

3月22日(火)～3月27日(日)  
午前9時～午後5時  
高知市民図書館

## 入選作品展

## ポリクロスアート(多極交叉芸術祭)展開催

本号四ページにも紹介されています  
ポリクロスアート展が開催されます事  
業団、郷土文化会館主催、同展実行委  
主管。

《現代美術の様相と断層から》と題  
されたこの美術展は、単なる展覧会を  
超えた催しにしたいという、各作家の  
意気込みが伝わってくるものと期待さ  
れます。

● 期間 昭和63年3月17日(木)～31日(木)

月曜日休館/午前9時～午後5時(最  
終日は4時まで)

● 場所 郷土文化会館 2階展示室  
● 入場料 大人220円、中・高生90  
円、小学生40円

なお関連企画として、大阪芸術大学  
教授の高橋亨氏をお迎えして、三月十  
七日(木)午前10時より県立図書館で、「最  
近のアメリカ美術の近況報告」と題し  
た講演会を開きます。

## 文化セミナー

### 姫田忠義氏の講演と映画を上映

二十数年にわたり日本各地を歩き、  
民俗文化を映像として記録し続けてき  
た姫田忠義氏(民俗文化映像研究所所  
長)をお招きし、「承けつがれている  
もの、凄さ」を求めて」と題した講演  
と、記録映画を上映します。

- 日時 4月3日(日)午後1時～4時半
- 場所 高知共済会館3F「金鶏」の間
- 参加費 300円

● 申し込み 3月30日(水)までに事業団  
まで電話か葉書でお申し込み下さい。  
定員は申し込み先着100名まで。

- 上映作品 「沙流川アイヌ・子どもの  
遊び」企画・アイヌ無形文化伝承保存  
会(50分)／「歩け三郎!」企画・周防  
猿まわしの会(40分)

## 第四回高知市都市美デザイン賞決まる

市民の方から多数のご推薦を頂いた  
都市美デザイン賞が決定しました。今  
回は推薦件数四十五点(実推薦件数二  
十八点)に上り、選考の結果、次の通  
りとなりました。

- ・入賞 ①青柳土佐日記ビル  
高知市はりまや町一四一
- ②レストラン自然堂  
高知市高須新町三一六一〇
- ③広松久稜邸  
高知市潮新町一四一六

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号  
TEL (〇八八八) ⑦四三六五  
郵便振替 徳島8-14869